

一緒に歩いていきたい

茨城大学教育学部附属小学校五年
浅沼稟佳

「稟ちゃん、障がいつて何だと思う？」
盲導犬ユーザーの森畑さんとオンラインでお話したときに
たずねられた質問です。

昨年、私の家でパピーウォーカーというボランティアを
しました。パピーウォーカーとは、盲導犬の訓練を受ける
仔犬と一年間家族の一員として一緒に生活するボランティア
です。このボランティアがきっかけで、私は、盲導犬に
ついていろいろ調べる事にしました。盲導犬の歴史や盲導
犬の一生は、本やインターネットで調べましたが、私が一
番印象に残っていることは、父と母に相談して、盲導犬を
パートナーにしているユーザーさんへインタビューができ
たことでした。

森畑さんは、四国に住んでいて地域の社会福祉協議会で
働いています。私はオンラインで初めて会って話をしたの
で、とてもきん張してしまいました。でも森畑さんが、優
しく、にこにこしているいろいろなことを教えてくれました。

森畑さんが私に「パピーウォーカーをしてきてくれてありが
とう」と言ってくれました。盲導犬は、はんしょく犬ボラ
ンティア、パピーウォーカー、訓練士、ユーザー、引退犬
ボランティアなど、多くの人の心がつながっています。そ
の輪の中に自分が関わっていることがうれしかったです。

障がいとは何か：森畑さんからの質問に、私は最初体の
不自由なところを思いうかべました。でも、森畑さんにとつ
ては、信号のない横断歩道であったり、道の段差、放置自
転車、はみだした看板などであり、障がいは、社会の中に
あると教えてくれました。目の見える私達は、無意識にさ
けて通りますが、森畑さんとスーさんが不便な道は私達に
とつても不便な道に変わりありません。

「稟ちゃんが知らなかったこと、初めて知ってびっくり
したこと、たくさんの人に伝えてほしいな」

森畑さんと約束しました。森畑さんは地元の小学校だけ
でなく、日本全国の小学校でもオンラインで盲導犬のこと、
障がいのことを伝えていきます。私にできることは、私自身
が調べた盲導犬のことや、森畑さんに教えてもらった事を
多くの人に伝える事です。森畑さんとスーさんが歩きやす
い社会を私も一緒に作り、歩きたいです。

森畑さんの目は、「網膜色素変性症」という、見えるはん
囲がどんどんせまくなってしまふ病気で、薬や手術でも治
すことができないそうです。そんな森畑さんのとなりには、
真っ黒でツヤツヤしたワンちゃんがありました。宝石みたい
な犬でした。パートナーの「スーさん」です。買い物に行
くときやお仕事に行くとき、パートナーのスーさんと一緒
に歩くのです。スーさんが右に曲がるとか、直進するなど、
道を覚えているわけではなく、森畑さん自身が音やにおい、
車道の様子などで、道を覚えていて、頭の中の地図にした
がって、スーさんに「コマンド」とよばれる指示を出して
連れていってもらおうそうです。小さな段差や路上の自転車、
看板など、スーさんは、森畑さんがぶつからないようによ
けて歩いてくれるので、「外に出るのが楽しくなった」と
話してくれました。安全に歩ける事やスムーズに公共交通
機関を使えることが当たり前前に感じる事が、「楽しみ」に
なると初めて知りました。

シヨウウコさんと私と

わたし

秋田大学教育文化学部附属中学校 二年

榎 奏 子

「こんにちは。」

玄関の引き戸の音と、間延びした声聞こえる。振り返ると、シヨウウコさん（仮名）がのっそり現れた。シヨウウコさんは知的障がい者だ。私の二回りくらい年上らしいが年齢不詳。同じ絵画教室にかよっている私の友達だ。シヨウウコさんは私のことを「カナコさん」と呼び、お正月には年賀状が届く。

私には小学校の頃から特別支援学校の生徒さんと一緒にボッチャをしたり、うどんを食べたりする機会があった。シヨウウコさんと初めて会った時も、ためらいを感じることなく話かけた。だが、シヨウウコさんは今まで会った人の中で断トツに強烈だ。マイペースで、笑いのツボも何に怒るのかもわからない。一つ言えるのは、食べていけば上機嫌ということ。そんなシヨウウコさんをこっそり観察しながら絵を描くのが、私のひそかな楽しみなのだ。

シヨウウコさんはいつもアトリエでゆっくりと過ごす。まるでシヨウウコさんのまわりだけ時間が止まっているよう

だ。実をいうと、描いているのをあまり見たことがない。というのも、シヨウウコさんはおやつを食べているか、キャンパスの前に座ったまま寝ているのだ。その姿は猫そのもの。教室のキョウウコ先生や他の生徒さんたちと繰り広げる会話もまるでコントだ。私は笑いをこらえることができず、よく一人で肩を震わせている。

そんなシヨウウコさんは、誰にもまねできない魅力的な絵を描く。秋田市で開催される「あきたアート はだしのころ」にもいつも出展している。穂積秋田市長さんがシヨウウコさんの作品を気に入り、ご自分のお小遣いで求めたという話も聞いた。シヨウウコさんは本物の画家なのだ。母は「二度みたら忘れられない独特の世界観ね。」

と言う。もしかしてシヨウウコさんの見ている世界は、私に見えている世界とは違うのかもしれないと思うことがある。

ある時から、アトリエにシヨウウコさんの姿を見なくなっ

ていた。それまでも休むことはあったから、特に気にかけていなかった。しばらく経ったある日、先生からシヨウウコさんのお母さんが病気で亡くなったことを聞いた。シヨウウコさんはどうしているのか、いろいろなことが頭をよぎった。お葬式には母が行った。シヨウウコさんが「お母さん、骨になっちゃった」と呟いたと聞き、居た堪れない気持ちになった。シヨウウコさんは

「天国から見守っていてください。」

とお別れしたという。「死」というものをどんなふうに捉えていたのだろう。

数日後、シヨウウコさんは何事もなかったかのように、のんびりとアトリエにやってきた。シヨウウコさんの表情はいつも通りぼんやりとしていて、やはりどんなことを考えているのかわからなかった。とりあえず、シヨウウコさんが絵を続けられてよかった、またあの面白い土曜日になる、そんなことを思った。

シヨウウコさんのお父さんが、脳出血で後を追うように亡くなったという知らせが届いた。シヨウウコさんのお母さんの四十九日の直前のことだった。これでもう本当に、シヨウウコさんは絵を描き続けることが出来ないかもしれない。私は勝手に、諦めのような気持ちを抱いていた。

最終的には、私の心配をよそに、シヨウウコさんは絵を続

けられることになった。シヨウウコさんが暮らすことになった障がい者施設の職員の方が送迎してくれることになったそうだ。ご両親が亡くなってもシヨウウコさんを支える福祉制度があり、支える人たちがいることに、私は心の底から安堵した。これからもシヨウウコさんはたくさんの人に愛されていくのだろう。

今日はシヨウウコさんに会えるかな、そんなことを考えながらアトリエの引き戸を開ける。

彼女の「すべて」

かのじょ

小林 咲 葵

学習院女子高等科一年

中学二年生の頃、ネット上で複数人と話すことができるアプリにはまった。そこは言うまでもなく多様な価値観や趣味、性格などであふれかえっており、Eちゃんとはそのアプリで知り合った。彼女はADHD且つレズビアンだった。ADHDとは注意欠陥多動性障害のことで、発達障害の一種だ。特徴的な症状としては年齢不相応の不注意さや、好きなこと以外は集中力、興味、関心がない「多動性」、思いついたことをよく考えずに即行動に移してしまう「衝動性」がみられる。また、レズビアンというのは自分を女性だと認識し、愛する人が女性のみの人を指す。このようなEちゃんに匿名で偏見をぶつける人もいたが、私は特に何も気にせずに接していた。というのも彼女は障害を隠しているわけではなくむしろプロフィールに障害を堂々と公表しており、そんな自分らしく堂々と生きているところや関西弁で明るく親しみやすい性格が好きだったからだ。私はユーザー名を好物のポテトサラダにしており、“ポテサ

ラ”と気兼ねなく呼んでくれていた。ある日、Eちゃんと私の会話を聞いていた友人から突然こう言われた。「あの子と話してて違和感ないの？ま、いいけどさ。」それから私は考えるようになってしまった。今まで気にしていなかったことが一々気になって「これはADHDの特徴なのかな。」と。例えば、たてつづけに話すところや急に違う話になるところ、同じ話を繰り返すところなど。「あつ、これさつきも言ってたな…。」何となく彼女の話に頷くばかりの会話に疲れてしまい、それまでは一週間に二回は話していたはずが、ほぼ話さなくなってしまった。いままではどう接していたのだったか…。

そして、その一か月後くらいに久しぶりにEちゃんと共通の友達のSちゃんの三人で通話することになった。いざ通話を始めると「彼女がさ、すっごくかわいくてな〜。」いつも通りの彼女だった。そうして「でさでさ、彼女がな…」

とEちゃんが話そうとして、長話に身構えた。ところがSちゃんは

「はいはい、さつきも聞いたって〜！」

と話し始める前に軽く受け流した。すると

「もう一回きいてや〜。かまってよ〜！」

と笑っていた。そんな感じでいいのか。もやが晴れるようだった。いままでADHDのことを気にしすぎて「彼女」を忘れていたのだなと思った。包み隠さず素直でサバサバしているところが好きで仲良くなったはずなのに、変な気を遣っていた私は、Eちゃんと障害を分けて考えてしまっていた。

障害があるからと、障害を気にして、相手にすべて気遣うことが大事なのではなく、その人との関係性にあった付き合い方を見つけることがお互いのためになることを悟った。障害への理解はある程度は必要なのかもしれないが、その過程で障害と性格を分けて考えるのではなく、障害も相手の個性として受け止めることが大事なのではないのかと思う。分かりやすく具体例を挙げると、“こういう障害だから、〇〇さんはこのようなことを言う”のではなく、“〇〇さんならではの言い方”のように相手のすべてをひとまとまりに受け入れるということだ。

現在、Eちゃんとは二年の付き合いになり、丁度良い距

離感と関係を築けたことで、何でも相談をしあえる程仲良くなった。先日、いつも通りに「バイバイ、またね。」と通話を切ろうとしたらEちゃんは電話越しに笑いかけた。「ポテサラのことだーいすきやで〜。また、話そうな〜」さりげない言葉が私の心を出来立てのポテトサラダのようにほくほくにした。

苦しくても、苦しくても

銘 莉 幸 也

私の身に起きた、数年間の出来事を精一杯あなたに伝えたい。

学生の頃、私は医師から強迫性障害と診断された。強迫性障害とは、ネガティブな言葉や感情を抑えきれず、強く頭に流れ込んでしまう症状だ。放っておくと徐々に嫌悪感もは広がる。そしてそれは行動を強制される症状のため日常生活に支障をきたす。

医師の話では、今まで気にさえ留めなかった「それ」に耐えられなくなっているということだった。私は大学を中退して、ひたすら元の自分に帰ることだけを願った。

当初は症状が酷く、リビングの灯りやちよつとした音に、全身を針で刺されたような鋭い痛みを感じた。

初めての体験に苛立ちと驚きで混乱する私に、母も同様の気持ちだっただろう。母と会話する時は顔を避け、一方的に「ごめんなさいと助けてください」の気持ちをぶつけた。母が涙を堪えてアイマスクを買いに出る姿は今でも鮮

もたない。

心身ともにクタクタでも無関係に、日々振り回されるストレス、不安、焦りが絶えず押し寄せるので、とてもじゃないが抱えきれないでいた。唯一、眠ることで「それ」から解放された。

悲しかったこともある。自分の気持ちを伝えられなかったことだ。たとえば「不必要に手を洗いたくなってしまっ」と相談しても「それなら手を洗わなければ良い」と返される。至極真っ当な返事に、話した自分がバカバカしくなつて、それ以上は続けなかった。心療内科の先生も同様でモヤモヤは晴れなかった。

苦しい……けど誰もわかってくれない……。自分の弱さに絶望しながら夜中、枕に顔をうずめて泣いた。「なんで……生きてるんだろう」そう思ったことも一度きりではない。それでも家族とともに、懸命に毎日を過ごした。過ごせたと言ったほうが良いかもしれない。

私の家族は、強迫性障害の小難しい内容を聞く事より、私を第一に受けとめたのだ。最初こそ何度も激しく手を洗う様子に心配していたが、段々何も言わなくなった。怖くて私から謝ろうとしたが「心配するな。できることはするから、とにかく頑張れ」と父に言われた。その父の言葉は私に、大きな温もりと元気を与えてくれた。今でも父と母

明に覚えている。

しばらくの間、食事は目を覆って食べた。パン一枚でも絶対に見ることはできない。ぼんやりした視界の中でおそるおそる食べた。それが一番食べやすかったのだ。また、箸でもフォークでもなく、スプーンを使ったほうが物を口に運びやすいことも学んだ。

部屋から出ることをやめ、そこに在るすべてに怯える生活が始まった。唾は飲み込まず、いつも栗を頬張ったリスみたいな顔。部屋のカーテンを常に閉めきり、暗闇の中に自分を溶け込ませた。曖昧な空間がなぜか居心地が良かった。

頻繁に蛇口へ急ぎ、口いっぱい唾を吐き出しながら気の済むまで手を洗う。手を洗うことで、一時的に落ち着いたが、やつと立っていられる程に疲労が襲う。それを一日に何度も行うのだから、腰を痛め、左人差し指の爪がもろくなって切れた。それでも手洗い行動を続けなくては心が

には感謝しても、し尽せない。

少しずつ「自分」を取り戻すと、一人の淋しさを意識し始めた。父と母に相談しながら、近くのボランティア団体から「私のため」の子犬を引き取った。名前はジャック。人懐っこい性格で、いつも励まされた。次第にジャックに話しかけることも多くなった。なんとなく向き合えたのが、楽だったかも知れない。

訪問看護に頼った頃から「少し頑張ってみてもいいのかな」と希望を持つようになった。テレビの代わりにラジオを聞いたり、おしぼりを携帯したりと日常に工夫を重ね、息苦しい生活を一歩ずつ良い方向へ変える努力をしていた。特に、友人の理解を得られたことが何より嬉しく、ずっと一人で背負っていた葛藤を断ち切れたのだ。

就労支援では、一人の男性職員に大変お世話になった。私は毎日その方と、雑談を混ぜた相談をしていたが、その度に必ず「大丈夫。絶対に大丈夫だよ」と何度も沢山の勇気を頂いた。

あれから私は、へたなりにも「それ」と向き合い続けている。就職もでき、以前の怯える私はもういない。勿論、今でも気を抜けば「それ」に吞まれることもある。それでも「絶対に大丈夫だ」と私は言い聞かせ続けている。

今後は支えてくれた方々に恩返しできるように胸を張って

人生を歩みたい。
私の体験があなたの為になれば幸いです。